

新潮文庫

曆

壺井 榮 著



新潮社

	曆
	定價 50 円

新潮文庫

昭和二十九年九月三十日 発行
昭和三十三年三月十五日 七刷

著 者 壺 井 栄

発行者 東京都新宿区矢来町七一
佐 藤 亮 一

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新 潮 社

電話東京三四局代表七一一(八)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

曆

壺 井 榮 著



新 潮 社 版

699

曆

「実枝、年忌の手紙出しといたか」

奥の部屋で出勤前の身支度をしながらのクニ子の声がせかせかと聞えた。茶の間の実枝は赤い箸でたくあんを挟み、わざとゆっくりと前歯で噛みながら、

「ん」と、どっちつかずの返辞をした。

「ん、じゃないでほんまに、まだ出しとらんじゃろ」

紫紺色の袴の後ろを引きずってもどかしい声で近づいて来た。一緒に坐る朝食なのに実枝はいつでもあとになり、というよりクニ子の方が落ちついていずにかきこんで、お茶ものまずに立ち上るので実枝は自然取残されるのであった。ちゃぶ台に肘などついてゆっくり構えている実枝に、クニ子のはがゆそうなパリパリした語調で、

「ぐずぐずしといたら間に合わんど、もうあと二十日じゃないか。世帯もちが今日に今日と家をあけられへんてさっさと案内しとかにや」

浴せかけるように云った。小学校の教師であるクニ子は奉職以来十年近くをずっと一年生ばかり受持たされていて、踊ったり歌ったり、とかく外光にあたる時間が多いのに、近頃は他の組の体操まで持たされて年がら年中紫外線を吸収しすぎている顔は、白い半襟の上で、実枝の言葉をかりると唐きび色に光っていた。

「出しときよっ」

「はいっ」

両方でかけ声のような叫び合いになったので二人はげらげら笑い出した。

今年はクニ子たちの祖母の十七年忌と、父親の三年忌に当るので、東京だとか神戸だとか広島などに散り散りに暮している姉たちに来て貰い、先祖や亡くなった兄姉の菩提をも弔おうという末っ子二人の思いつきなのである。謂わば、今まではお世話になりましたが、自分たちにもこんな世間並みなことも出来るようになりました、と云う大人ぶった気持と、父親の葬式以来会わない姉たちに会いたいための甘えた計画でもあった。

クニ子は袴の後ろ紐を前でぐっと下げて結びながら腕時計を見、急に慌て出した。

「実枝、ほらほら、弁当、弁当」

早口にそう云って自分は足袋蹴足で片足つま先立って下駄を出している。実枝も立ち上って一しよに慌て、ほれ、ほれ、と台所の上り框に置いてあった弁当包みを渡した。傘を大袈裟にふり、

朴齒の日和下駄を踏石にかたかた鳴らして風を切るように駈け出すクニ子の後姿を見送り、実枝はふう、と声に出して息をついた。縁に腰をかけ、先刻とはあべこべに、

「やれやれ、せわしないこっちゃ、ほんまに」と、母親のような口ぶりで呟いた。

毎朝実枝にさんさん急ぎ立てられるまでクニ子はひと時花畑に入りこんでデキタリスの花の数をかぞえて見たり、向日葵と背比べをしたり、薔薇の匂いに小鼻をうごめかしては悦に入ったりするのであった。家の前を真直ぐに通りの小径につながる敷石道を挟んで両側十坪ほどずつの空地にとりとめもなく草や木を植えこんだそこを、クニ子は大袈裟に「花園」と云った。季節々々の種を蒔き、花を咲かせることがクニ子にとっては時には教職と同じほどに大切であるらしく、一本々々の草や木は教え子へのような周到さで育てられて行った。今朝も実枝は何べん呼びかけても家に入って来ない姉に、

「姉やん、明日があるがいやほんまに、えい加減にしい、味噌汁が冷めら」

ぼやきながら自分も「花園」へ近づいて行くと、朝顔の移植をしていたクニ子は泥だらけの指先を払うようにして、手首で乱れた髪の手を後ろへ撫であげ、

「そう云うなっちゃ実枝、もうこれですんだんじゃ、今年や十五センチを咲かそ思てなあ、見よって見い」

人の好い笑顔で妹を見上げた。

「あきれた姉やん、まだ顔も洗わんと！」

実枝にそう云われてはたばたと支度にかかったのであった。

朝顔と云えば実枝は去年の夏のことだと思ひ出されて、ふっふとひとりで声がこぼれた。

「大変々々、実枝よ早よ早よ」と突拍子もないクニ子の大声に、まだ寢床の中でうつうつとしていた実枝は何事かとはね起きて縁側にとび出すと、クニ子は隣りとの境界の朝顔の垣のそばで片手に巻尺を持ったまま相好をくずして此方へ猫まねきをし、

「実枝、まあ早よ来て見い、十三センチ五ミリあるがいや」

朝顔が直径十三センチ五ミリの花を咲かせたというのである。

「何ぞいや姉やんほんまに。くちなわでも出て来たんか思や」

そうは云いながら実枝は下駄をつっかけた。ほんやりと淀んだような朝の空気の中で、しめりを含んで垣根一ぱいに繁っている朝顔の葉のみどりの中に、瑠璃色の十三センチ五ミリは襲をゆるく波打たせ、赤や白の花々の群を抜いて大らかに咲いている。二人はそれに顔を近づけて眺めた。家の前の小径を朝畑に出る隣りの小母さんが目籠を背負って通りかかり、

「何ぞいな、早うから」と声をかけた。するとクニ子は「小母さん！」と、その方へ又手招きをしながら、普段と声をかえて、

「まあちょっと来て見てつかあされ、うちの朝顔がこんな大けな花を咲かしてなあ」

と、両手で輪をつくった。小母さんが近づいて来るとクニ子は巻尺を花の上でぴんとはり、十三センチ四ミリ半、まあ十三センチ五ミリじゃなあ、と笑顔を向ける。

「ほんになあ」と簡単にほめておいて小母さんはすぐに又畑の方へ上って行った。その背中へクニ子は、

「来年はな小母さん、種子^{たね}を上げまっせ」

そして、裏の共同井戸の物音を聞きつけると、今度はそっちの方へ走ってゆき、

「下の小母さん、朝顔の花見に来てつかあされ。コノエさん、朝顔が十三センチ五ミリの花が咲いたんで、来て見い」

と、井戸端の年寄りや近所の嫁さんに呼びかける。コノエさんはもう朝畑をして戻って来たらしく、桑の束を井戸の中へ吊していた。クニ子とは小学校から同級生でお互にあげすけなもの云いの出来る間柄であった。

「三十とはたちをすぎたおなごが二人、起きぬけでべべも着換えんとからに、十三センチ五ミリの朝顔じゃといや、聞いて呆れら」

冗談ながらそう云われるとクニ子ははじめて自分のなりに照れ、それでもコノエさんが妊娠の大きな腹をつき出して歩いて来るとほっとした顔つきで、

「そう云いなさんなっちゃ、これ見たらなるほどと思わ」

ともう自慢で花のそばへ案内した。

そんな工合にクニ子の草花への心の持ち方は異常なものがあつた。

今年もまた、クニ子の独り約束で蒔かれた朝顔は近所合壁の垣根や窓先に芽生えかけている。

花にはまだ遠いがやがて一せいに咲き出すであらうし、したらクニ子は満足の顔つきで花に見送られてゆうゆうと出かけ、やがて夏も終りかける頃には葉鶏頭やコスモスなどにとりかこまれた家々の間の小径を、夕陽にまぶしく照りかがやくそれらの花を生徒を眺めるようににこやかに、胸を張って帰って来るであらう。

そういうクニ子のことを、実枝は此頃いろいろ考えるのであつた。一昨年までは病気の父親を抱えて結婚したくも出来なかつたのでもあるが、それでなくてもクニ子は縁談が持ち上る度にいやがつた。

「あれはな、うちが先生しよらなんだら貰いに来やせん。うちの月給と結婚したいんで」
又ある時は、

「実枝、聞いたか、男いうもんはあんなんど。やれ財産があるの、やれ何とか議員でござるの、まま子が三人あることは忘れとったように帰いにしなに小んまい声で云うたなあ」

そう云ってふっふっと笑うクニ子。そして此頃では仲人に立つ人がその話にかかると、

「あ、そのことでしたら私はもう結婚はしませんから」

と、ろくに話も聞かずに鼻先をへし折ることさえある。実枝が氣をもみ、「姉やんのように考えたら嫁さんに死なれた男は皆悪人ということにならあ、もっと考えようがあらうがいの」

「いいや、誰が何と云おうとも嫁にはゆかんのじゃ、うちは男に養うて貰わいでも、みんなと食うてゆけるさかいな」

「ほんなら姉やん、男に養うて貰うために嫁にゆくんかいや、誰でも」

「そうじゃ」

「ふうん」

お互にむらむらとした顔つきで黙り合う。

姉妹二人暮しの中で職業を持つクニ子に代って一家の主婦の役目を負わされている実枝は所謂世間というものをクニ子よりは知っていた。それに比べると文字通り十年一日七つ八つの子供を相手に暮しているクニ子は単純で好人物なくせに、融通のきかないような一面をもっていた。世間の人は何故クニ子さんは嫁に行かないのかと実枝にたずねる。その度に実枝は辛かったり、悲しかったりする。結婚生活というものが仕合せて通せるものかどうかそれは分らない。しかしクニ子のように再婚だから不幸だとか、その不幸が皆男のせいであるような考え方は実枝には出来なかった。それは実枝自身に恭平という将来の相手があるからであらうか。恭平は少し離れた村

の農会に技手として働いている青年である。実枝はその恭平の日に焼けた顔を思い浮べるだけでも自分の仕合せが胸の底から湧き上って来る。この仕合せをクニ子は知らないにちがいない。平気で花を作っているけれど、いつまでも平気で花に心を傾けていられるであろうか。あの花への愛情と熱情を、せめて半分だけ自分自身に向けることは出来ないのであらうか。あの情熱はちょっと方向をかえればもっと大きな喜びの中で、もっと大きな花を咲かせるかもしれない。実枝はどうかしてクニ子の肩をつかまえ、クニ子が背を向けているものに面と立ち向わせたいと思うのであった。

二

同じ両親、つまり日向重吉と妻いねの間に生れ、大勢の姉たちの誰とよりも永年一しよに暮して来ている二人であるのに、クニ子と実枝は両親の血を別々に分け合ったように異った性質に生れついていた。その顔立ちまでクニ子は瘦せ型の母親に似ている！ 実枝の方は父系似で、若い時から十七貫を下ったことがなかったという祖母のかやに生写しの丸い、太ったからだをしていた。

人間の持前の性格というものが、生れ出る前後の両親の置かれた環境に多少とも左右されるということが有り得べきことならば、その結果はクニ子の場合にもあてはめられるかもしれない。

十人兄妹の九人目であるクニ子が生れる時、日向の一家はその二三年前から徐々に樽屋の仕事を失いかかっていて、大勢の家族はその日その日をつなぎかねる程のどん底に落ちていた。もうあと一年で師範学校を出る長男の隼太が夏休みに帰って来ている所へ債権者がつめかけ、高松の学校へ行く程の金があるなら貸金を返してくれと若い隼太を泣かせたり、いねが実家へ相談にゆくともうその顔を見ただけで逃げ腰の兄の態度にいねを憤らせたり、時には重吉を自棄酒に浸らせたり、このままゆけば家も屋敷も売払ってしまわねばなるまいというところまで行っていた。そういう時に望まずして生れて来たクニ子は、まるで一家の苦悩を分け合ってもいるようになし、そしてその両親と一しょに世間を狭く感じているような顔つきで成長して行った。髪の毛の逆立っているクニ子の守りもをしながら祖母のかやは口ぐせに、

「^え好い子になれよ、好い子になれよ」

とその逆立った髪の毛を撫で下した。頭を撫でてやると疳が納まるというのがかやの信条で、かやは上から下へ九人の孫の頭を撫でて来たのであったが、髪の毛が逆立っているのはクニ子だけであった。いねはいねでろくに菓子も買ってやれない時代に育つクニ子への不憫さから、我身をけずる結果を知りながらいつまでも乳を与えた。今まで八人の子供たちが一年置きに生れる妹のために自然にゆずっていたのとはちがって、クニ子は末っ子の特権のように出もせぬ乳にぶら下り、いねは又それで埋合せをつけるような気持で、しなびた胸をはだけていた。それでもクニ

子が八歳になり、今年から学校ということになると、

「先生に笑われる」と、クニ子は自分からやめた。

四月一日、その日、クニ子は朝早くから鞆を肩にかけて母親を急ぎ立てた。

「おいや、嬉しいこっちゃんあ」

いねは自分の嬉しさもこめて、急ぎ立てられるままに手織の紺の着物に着かえ、中幅帯を引上に結んだ。嫁入る時持って来たいねの母親の自慢である着物が三十年後の今日大して派手にもならず自分の身に合っているのが不思議であった。娘の時、藍から作って、母親と二人で染めたその藍の色がよく枯れて、大事に着たせいか、これから先もまだ何年着られるか分らない程しかりしている。そんなことまでが何か自分と深い関りでもあるようにも考えられ、クニ子と同年の子を持つ村の若い母親達に交って、末っ子を小学校にあげることが、何か自分にもこれから、今までと異った新しい生活がやって来そうなはずんだ気持でクニ子と手をつないで出かけたのであった。長男の隼太も任地の高松で嫁を貰っているし、長女のミチは醤油会社の杜氏（とうじ）をしている男に嫁入り、広島で世帯を持っていた。考えて見れば、いねはわき目もふらずに子育てに明け暮れた三十年に近い月日が永かったとも短かったとも云いようのない思いであった。ましてここ十年の労苦はいねの頭を年よりも白くさえしている。

——これからは偶には金比羅詣り位出来るじゃろ、そしたら隼太の所で洗濯をしてやったり、

ミチの所へも行つて一月位手伝い、宮島さんへ案内してもらおう――

いねは、有り来りの母親の持つ望みを自分もやはり持っていた。そう考えることで永い人生の峠に腰かける場所を見つけたような喜びがあった。腰かけはでこぼこの石であろうとも木の根であろうとも、疲れが休まるにちがいない。此世の女の負わねばならなかった重たい荷物、それをちよつとの間でも肩からはずすことの出来るという心のゆとりが、今はじめて自分にもめぐって来たように思えた。そう思う氣持の次には、これからは孫の世話も見ずばなるまいと、本能的にまだ形のない孫へのあこがれをも持つのであった。

そんないねに、一大事が持ち上つたのである。もう女としてのつとめがおしまひになったのだらうと思つたからだの異状が妊娠と判つた時、いねはあまりのことに青くなり、重吉は重吉で無事に生めるだらうかと年とつた妻を眺めた。やせこけて老婆のように目はくぼみ、今更どこに母となるべき力がひそんでいるかを疑わせるほど衰えてしまっているいね。そのいねの妊娠は村中どころでなく近村の噂にも上り、中には無遠慮に、

「四十四の尻ざらい、四十五の業ざらしというがおいねさんは何ぼになりやあ」と聞く人もいた。いねはその時四十六であり、生むのは年明けのことになるので四十七になる。ふが悪い、とこぼすと重吉は、

「何のふが悪い、不義の子じゃあるまいし」と声を荒らげるのもはげましの氣持から出る言葉で